

筑後川中流域の河川景観の視点場について

九州産業大学工学部 正 員 山下 三平
九州産業大学工学部 学生員○尾田 丞
九州大学工学部 正 員 平野 宗夫

1.はじめに

河川であれ都市であれ、景観を問題とする場合、その視点場が重要なファクターであることはいうまでもない。従来、視点場とそこからの景観の善し悪しを議論するために扱われてきた素材は、浮世絵をはじめとした絵画、人々の伝承やすぐれた観賞者の意見、あるいはそれらに基づく名所図絵や新しい観光案内などである。これらの素材はいずれも、地域風土や時代状況を背景にしているものであり、重要な観点を我々に与えてくれることが多い。しかしその一方で、我々を固定した観念にとらわれさせてしまう危険も少なくない。

そこで本研究では、人々の日頃の景観体験そのものに重点をおき、その景観体験の行動を追跡する客観的で発見的な手法を採用する。その手法に基づいて、多様な水辺空間と視点場が考えられる筑後川中流域を対象として調査を行ない、人々が視点場を選択するプロセスと選択された視点場の特性を明らかにすることを研究の目的とする。

2.調査と分析の方法

調査対象地域は筑後川中流域の田主丸町全域である。同町には巨瀬川、三津留川、雲雀川等の中小河川とその流入水路、および耳納連山からの小河川など、多様な水辺空間が形成されている。住民に身近な河川環境を1日で自由に撮影してもらい、その景観の認知と評価を分析するための「写真投影法¹⁾」の調査(93年8月17～31日)の後に、その撮影の行程すなわち視点場の移動行程と、視点場の特性を含む景観の物理的特性を追跡調査した(93年10月23日～12月17日)。本稿ではそれをもとに、視点場移動距離の算定、視点場の同定、およびそれらの成人と子供の比較を行なう。また、著者らが先に行なった福岡市を流れる3河川(那珂川、御笠川、および室見川)沿川地区と柳川堀割周辺地域における同様の調査結果²⁾との比較をも行なう。

3.視点場の移動距離

視点場の平均移動距離は成人の場合、5.85Kmであ

り、子供の場合は5.29Kmとなった(表-1)。成人の方が大きな値をとるのは、著者らの都市河川における先の研究²⁾と同様であり(表-2)、成人と子供の移動手段の違いによるものと思われる。

また、田主丸の場合、柳川と同様に成人と子供の差が小さく、かつ5～7Km程度となつていところ類似している。福岡市を流れる3河川(那珂川、御笠川、および室見川)沿川地区の場合、子供の移動距離が1～2Km程度であり、田主丸ならびに柳川と異なっている。

柳川と同様に田主丸も多様な水辺空間と河川景観の視点場を有しているために、高度に土地利用のなされている福岡の場合と異なって、現在でも子供が成人の幼少期と同様の、多様で頻繁な水辺体験をすることができる。このために田主丸と柳川では子供が成人と同様の広い範囲での地域の水辺空間の認知をすることができ、視点場移動の距離が子供の場合も大きくなったものと思われる。

表-1 視点場の移動距離(田主丸)

	平均距離(km)	最大値(km)	最小値(km)
成人	5.850	16.056	0.568
子供	5.290	34.256	0.000

表-2 視点場の移動距離(都市河川沿川地域²⁾)

河 川	成 人	子 供
那珂川	5.5km	1.2km
御笠川	1.9	2.4
室見川	5.4	1.5
柳川堀割	7.3	5.6

4.主要視点場の同定とその特性

100m×100mのメッシュごとに視点場選択の度数を求め、その高いものを地図上に示したものが図-1である。これによれば視点場選択に成人と子供で差が現われている。子供の視点場として頻度が高い地点である筑後川橋付近(図-1の左上)は、広い高水敷と公園をもち、なおかつ水に近づきやすい河川空間である。

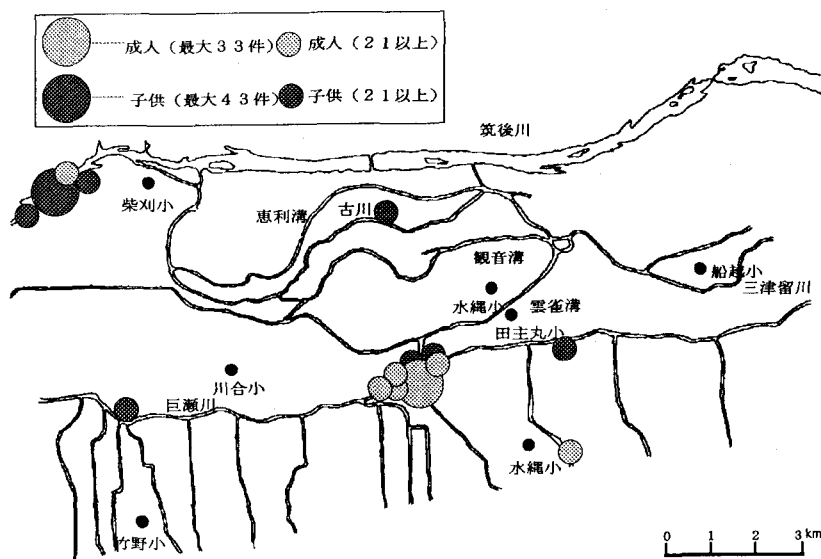


図-1 視点場の選択度数の分布

表-3 主要河川ごとの視点場選択の頻度分布

河川	撮影件数	
	成人	子供
筑後川	238(14%)	192(13%)
三津留川	52(3%)	65(4%)
雲雀川	136(8%)	106(7%)
古川	154(9%)	110(7%)
恵利溝	40(2%)	17(1%)
観音溝	10(1%)	27(2%)
巨瀬川	416(24%)	441(29%)
耳納連山から流れてくる川	281(17%)	294(20%)
その他	373(22%)	263(17%)

一方成人の場合は、巨瀬川の中心街に位置する区間（図-1の中央下寄り）で度数が高い。子供の場合は遊びの場として景観体験がなされることの意味が大きいものに対して、成人の場合は日常の場の中に河川のような自然景観を体験することに意識的になりやすいと解釈することができそうである。

5.河川ごとの視点場の分布

河川ごとに視点場の選択頻度を整理すると表-3のようになる。名称の明確な河川の単独での選択頻度は、巨瀬川と筑後川が比較的高いことがわかる。しかし、

全般的に視点場選択頻度がかかなりばらついているようすもうかがえる。また、この表によれば成人と子供の河川ごとの視点場選択の頻度がよく似通っていることがわかる。この二つの点は先述の柳川堀割の場合と同様であり、これも田主丸と柳川の子供では、成人が幼少期に体験したことが現在でも体験可能なことが理由と考えられる。

6.おわりに

住民に身近な環境を撮影してもらい、その撮影行動を追跡する方法は、人々の景観体験をリアルに把握することができるため、視点場特性の把握において有力な方法として応用可能と考えられる。本稿では、田主丸という地域を例として、視点場選択の移動距離や頻度といった量的な検討からこの地域の視点場の特性を明らかにすることを試みた。また、都市河川の場合と比較しながら、子供と成人の視点場の移動距離や河川ごとの選択頻度の違いを、両者の体験の異同によって説明した。

今後は河川ごとだけでなく、橋梁、堤防、あるいは高水敷等により細かく視点場の分類を行なって、その特徴を把握するとともに、各視点場における撮影の視距離、視角、あるいは撮影時間の特性をも検討する予定である。また、歴史的な伝承等との関連から質的な問題としてもアプローチしていくつもりである。

謝辞

本研究は河川環境管理財団による平成5年度河川環境整備基金助成『河川の原風景とその技術史的検討に基づいた中小河川の景観設計』（代表者：平野宗夫）および平成5年度文部省科学研究費奨励研究（A）『筑後川中流域の環境イメージの基礎研究』によった。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- 山下他：写真投影法による筑後川中流域の景観評価、平成5年度土木学会西部支部研究発表会講演概要集、1994。
- 山下他：子供の目に映った河川環境とその評価に関する研究、土木計画学研究・論文集、No.10、pp.271-278、1992。